

2011 年国慶節、馬英九の演説批評

呉釗燮

2011 年の国慶節における演説で、馬英九は「中華民国」の大風呂敷を拡げ、明らかに「中華民国」史観を打ち立てようとしていた。しかし、馬英九の観点には多くの問題点が内在する。

馬英九の語る中華民国とは、中国で孫文によって設立された興中会であり、清朝を倒した国家であり、台湾をも領有する国家を指している。馬総統の中には、中華民国が主権を有し、台湾も中華民国の一部分だという認識しかない。つまり、中華民国は国家であり、台湾の地位は非国家であり、中華民国が統治する一地区、というものだ。こうした考え方は、あるいは馬英九本人や一部の人々が歴史的に経験した事柄と関係があるかもしれない。しかし、その経験は他の多くの台湾の人々が経たものとは全く相反するものと言わざるを得ない。実際、大多数の台湾人が経験した歴史とは、1949 年以降、中華人民共和国に追い出された「中華民国」であり、言い換えれば「中華民国」はすでに台湾と一体を成すものなのである。中華民国の領土は、大陸を含むようなものではなく、台湾に限られたものであり、台湾の正式な国名が中華民国なのである。これが台湾の現状と事実であり、台湾はこの事実を受け入れれば、中華民国は根拠のあるものとなり、事実上の国民および主権を有することが出来るのである。

馬英九の国慶節での「中華民国」演説に関し、AIT(米国在台協会)の見方を検証すると、馬英九は中国の民族主義者という結果になる。しかし、こうした見方はやや解釈するには難しい状況を作りだしている。台湾の国民によって選出され、台湾人の納税によって給与を得ている国家のリーダーが、驚いたことに台湾の民族主義者ではなく中国の民族主義者なのだ。中国の民族主義者は中国の強大さを目にし、中国文化の発揚を望んでいる反面、日本との歴史の因縁を忘れようとはしない。こうしたことから、国慶節での馬英九の歴史的叙述から分かるのは、馬総統は台湾に脅威を向ける中国政府に媚びを売ったことである。

馬英九が演説で言及した「中華民国」の概念において最大の問題は、彼自身が持つ、少数の人としか共有できない歴史観や民族主義を、多くの人々に強要したことであり、まさに独裁国家にだけ通用するやり方である。こうした歴史観を認められない人々は、中華民国を認めないと見做され、族群対立を弄っているとされるので、あたかもほとんどの民衆が国民ではないのと同じようだ。馬英九は演説の中で、民衆は揃って中華民国の確固たるアイデンティティを確立させ、中華民国憲法を全国民のコンセンサスあるものとしようと言及したが、この状況はシリアのアサド大統領が少

数派のアライ派のアイデンティティを強化して多数派のスニ派を駆逐したのと変わりが無い。アイデンティティとは、自身の内心に帰属するものであり、コンセンサスとは対話を通じて生まれるものであり、独裁者が人民に強要するものではない。

長年にわたり、中華民国の実質的な領土は台湾に限られていた。台湾が中華民国の呼称を付けられても、台湾人民はそれを許容し、さらには香港生まれで自称中国人の人間を総統に選んだが、なぜ2300万の人民から選挙によって選ばれた総統が、現在まで理解できずにいるのだろうか。馬総統の有権者は台湾人民だけであり、台湾の選挙民を主体とした主張はどうやっても虚構であり、台湾に背徳したものである。台湾の人々によって選ばれた総統にもかかわらず、彼の考える「国家」とは歴史の中にだけ存在する中華民国だということが、台湾の人々には理解できず許すことも出来ない事柄なのである。

馬英九が総統となり3年、台湾国内の内部対立の状況は日増しに深刻化している。問題の所在は、馬英九の国家アイデンティティと台湾の人々のそれが異なることにあり、それが民衆に疑義を抱かせることとなっている。また、総統は常に様々な争議のある歴史観を持ち出している。例えば、台湾は中国の一部という虚構を強化するために、カイロ宣言のニュースリリースを歴史的資料と位置付け、日本が台湾を「放棄した」だけであり、いかなる国家に対しても「返還」などしていないという歴史的事実を曲解しようとしているのだ。総統がこれまで理解しようとしなかったことは、なぜ台湾の人々50年にわたる日本の植民統治を経てもなお日本人に対し恨みつらみを持つことがないのか、ということだ。馬総統が常に抗日戦争に言及し、日本への恨みを語ることはまったく異なる。総統までも台湾の人々が主人となる権利を無視し、中国が「台湾は中国の一部」と発言しても完全に否定することがない等、これらのことが上述の問題の解決をより難しくさせていることなのだ。

台湾の内部では確かにアイデンティティの差異が存在し、異なる歴史経験も存在する。しかし、一つの国家のリーダーとして、国家内部の分裂や歴史の傷跡を補修することは看過できない職責である。しかし、我が台湾のリーダーはそうした責任を果たそうとする努力を全くしていない。馬英九が台湾内部のアイデンティティの差異を認めず、重視せず、処理しないことは、結果的に多くの人々が彼の兩岸政策に不信任を突きつける要因となっている。さらに悲劇的なことは、馬英九は台湾の人民が何を心配しているかについて全く無知なことである。「92コンセンサス」は馬英九にとって「一中各表(一つの中国の定義は兩岸それぞれが定義すればよい)」の意味に過ぎないかもしれないが、これにより、中国が国際社会において台湾を孤立化させ、中国が台湾を代表すると喧伝し、中華民国を消滅させることを阻止できなくしている。そして、「92コンセンサス」を掲げているだけで、国際社会は台湾がもはや「一つの中国」の原則を受け入れたものと見なすことになるのだ。

馬英九は兩岸政策を就任以来最大の成功と考えている。しかし、馬英九は国際社会で中国が国際社会で台湾の妨害をしていることに表立って反対出来ず、持続的に台湾に対する軍事的脅威を増加させていることについても何ら意見を表明出来ずにいる。また、中国が台湾をその一部分だと言及してさえも、反発出来ずにいるのだ。これらのことだけで国民の国家元首に対する不信感は増大する。憲法に照らせば、台湾総統の職責は内部の執政だけでなく、国家主権の独立の維持、国家の安全保障による脅威の排除にあるが、現状では、台湾の民衆は明らかに馬英九が総統にふさわしいと認められないのである。